

# 一心寺かわら版

第十三号 平成二十年三月発行

## 「インド・ネパールの仏蹟を巡拝して」

三月三日～十一日にかけて仏教青年会主催によるインド・ネパール仏蹟巡拝旅行に参加しました。そこで今号はその旅行記を掲載します。

三月三日、関西空港にて参加者が揃い十一時離陸、タイ・バンコク経由でインド・デリーに現地二十三時（日本時間二時半）に到着した。機内では一夜漬けでヒンドゥー語の勉強。現地ではガイドのラヴィさんが出迎えて下さりホテルへ。

二日目、仏蹟に近い都市ラクノウまで空路で向かうが一時間以上遅れての離陸、インドでは当たり前らしく時間に正確な日本とは違う。ここからバス移動、ガイドに加えて運転手、助手が旅の道案内だ。アスファルトが悪いためかなり揺れる。初めての現地での食事はもちろんカレー、香辛料の利き方が日本とは違うがこれはこれでおいしい。しかし三、四日で飽きてくる。・日本の食事はおいしい。

バス移動は驚きの連続だ。交差点はロータリーで信号はほとんどない。人、自転車、リクシャー（自転車や三輪車のタクシー）、車、それに加えて牛、思うままに動いており、その中をすれすれでかわしていく。車は色々な鳴らし方のクラクションで「よける」とか「先に行け」と会話しているようで、パッシングや助手の手と

声による合図も用い、阿吽の呼吸で運行している。中央線はないに等しく、無理だと思われる追い越しも平気でやる。恐るべしインドの交通事情。

目的地はサヘート・マヘート（祇園精舎）。インドは荒れた大地というイメージがあったのだが実際は緑の平地が広がる。しかし常に土埃が舞い上がり、家はほとんどが壊れかけのレンガ造りか茅葺きの家、放し飼いの牛や山羊、日本でいえばいつの時代だろうか。インドが発展しているというニュースが嘘のようだ。都会は少々きれいだがやはり土埃まみれ、日本は美しい。

途中道端の店で度々インドのお茶「チャイ」（濃く甘い香料の入ったミルクティー）を頂く。不衛生は気にならないもののおいしい。



祇園精舎は『阿弥陀経』が説かれた所だ。そのレンガ造りの遺構にはスリランカ？の人々が金箔を貼り付けて礼拝し、勤行や説法が行われている。ここで五体投地（額・両肘・両膝を地面につける礼拝）して合掌、ちょうど夕日が沈みつつあり、在りし日の釈尊を思い感慨深かった。

三日目、朝ホテル近くを一人で散策し現地の老父と「ナマステ」とあいさつ。今のところ怖い雰囲気はない。バスは爆走を続けたが、ついに危惧していた事故が起きる。十五人ほど乗せた荷台を引くトラックを追い越そうとしたが、相手が右に寄れて接触。少々衝撃があったが幸いにもけが人はなし。十分ほど口論をしたが結

局何もなかったかのように走り出す。これでいいのだろうか。

まずインド側にあるカピラ城址（釈尊の父・スッドーダナ王の居城）を見る。ここには当時八分された釈尊の舍利（遺骨）が埋められストウーパ（塔）が建てられていたとのこと。

さらに走りネパール国境が近づくとにぎわいが増し、出入国の車と人で混雑し進めない。バスを降りて入国書類を記入し歩いて国境を越える。国境の街を歩き、頭に布を巻く現地人を真似しようと（ターバンを巻いているのはシーク教徒だけらしい）買い行くが見当たらない。



そのうちにバスが到着し釈尊生誕の地ルンビニへ。観光地には物乞いが集まってくる。ガイドからは相手にしないと言われたが、申し訳ない気持ちもあり時々布施しながら通り過ぎる。マヤ（ネパール人で釈尊の母の名）堂は三世紀頃建てられたレンガの遺構で釈尊が生まれた所である。外には祇園精舎と同じく菩提樹と仏旗色（青・黄・赤・白・樺の五色）の布に経文？を書き込んだものが張り巡らされていた。

四日目、まずネパール側のカピラ城址を見る。こちらからインド側に移ったという説や王の居城と僧院に分かれていたという説などがあるらしい。街では「シヴァラートゥリ」というヒンドゥー教のシヴァ神の結婚を祝うお祭りでにぎやかだ。バスが進まないほどの所もあり、色々な出店や竹で作った観覧車などもあり楽

しそうだった。



六時頃、釈尊涅槃の地クシナガルへ着く。お堂の中には有名な黄金の釈迦涅槃像があり、現地ガイドの解説を受ける。涅槃像はイスラム教徒による破壊で川に流されていたものが見つかり安置されたとのこと。顔を直視すると笑顔、胴か

ら見ると涅槃の顔、足下から見ると死に顔に見えるらしい。

五日目、朝日を拝みながら再び涅槃堂へ向かう。涅槃像の足裏に手を当て合掌した後、讃仏偈をあげる。多くの人がそれぞれの国の言葉でお勤めする中での勤行だったが、不思議と心静かである。然と経文が口から出てくる。これも仏の聖地の成せるわざだろうか。

お参りを終えヴァイシャリーを目指す途中、道路沿いの畑に遺体とそれに群がっている人々が見えた。ガイドの話によるとここビハール州は治安が悪く殺人もよく起こることとのこと、またインドの厳しい現実を知らされ合掌して走り去った。

ヴァイシャリーのアショカ・ピラー（釈尊に帰依したアショカ王が法勅を刻み立てた柱）はライオン（アショカ王の象徴）の彫刻も立派で当時のまま残っている。この地は植物なども亜熱

帯の雰囲気があり非常に美しい。釈尊がこの地を去る時に「ヴァイシャーリーは楽しい」と言い残したというのも頷ける気がした。

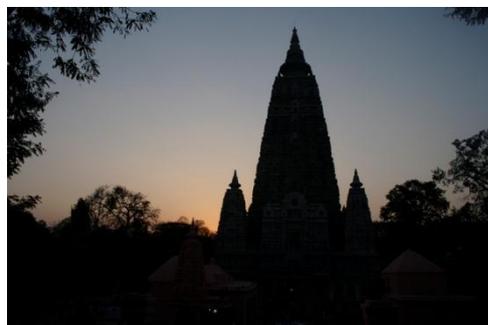
六日目、まずナーランダへ行き仏教大学跡を見る。紀元前三世紀に釈尊の弟子・舍利佛の墓が造られ大きなストウーパが建ち、その隣に五世紀ナーランダ大学ができた。玄奘三蔵もここで学び先生になったそうで、当時は十キロにも渡る広さで一万八千人近い僧侶が哲学や仏教などを学んだという。



次にラージギルへ入り竹林精舎に立ち寄った後、霊鷲山へ登る。ここは『無量寿経』が説かれた所である。今はきれいに舗装された山道を二十分程歩くと頂上の遺構へ到着。警官らしき人から渡された線香と花輪を供え、釈尊が『無量

寿経』を説いた地点で合掌礼拝、みんなで讃仏偈を誦する。ちようど私たちしかいなかったため、太陽の下、心を込めてゆつくりお勤めし清々しい気持ちになった。ここが浄土真宗の根源、阿弥陀仏の本願が開顕された地かと思うと感慨深い。

続いてはブツダガヤ、大菩提寺の周りはずいぶん人出だ。靴を脱ぎ堂内へ入り、他国の方が布施した黄衣が釈尊像に掛けられる中、お勤めさせていただいた。ここは釈尊が菩提樹の下で覚った所、



今の木は当時のものではなくその子孫らしい。またその下に釈尊が覚った地をあらわす金剛法座があるが、今は囲いがされている。オウム真理教の麻原彰晃がここに座ろうとした事件があったためらしい。人が多く、落ち着いて釈尊成道の姿を偲ぶことができなかったのが残念。

七日目、列車でヴァーナラシー（ベナレス）へ。まず現地のオイルマッサージ・アーユルヴェエーダを体験した後、初転法輪（釈尊が初めて説法した）の地サルナートへ。

サルナートではまず博物館を見る。紀元前三世紀からの仏教宝物が展示されている。特に五、六、十、十一世紀のものが多く、この地に当時仏教文化が開花していたことが解る。仏像の顔は非常に端正で美しく尊い雰囲気を醸し出している。またヒンドゥー教に関する物も展示されているが、双方とも十二世紀にイスラムによる破壊を受けている。

遺構にはダメーク・ストウーパという五十メートルにも及ぶ大きなものがあるが、当時は一万ものストウーパがあったといわれ、その一つに釈尊の舍利が収められていたらしい。しかし後の王が誰のものとも分からないままガンガーに流してしまったらしく、現在はその容器のみが残っており、他の博物館にあるとのことだった。

夜はガンガーの礼拝プーリヤーに出かけた。途中オレンジ色を

身にまとい音楽を流しつつ行進する人々や、太鼓に合わせて激しく踊る女性など、お祭り雰囲気味わいながら進む。ガートといわれる川岸の沐浴場に着くと、ハルモニウム（アコーディオンのような楽器）とシタール（大きな弦楽器）が鳴り響き、男が歌い続けている。川岸では五人の男が美しい衣をまとい炎や花びら、香などを用いて祈りを捧げている。その意味は完全には理解できないものの何か崇高なものを感じる。一時間ほど見とれるように眺めていたが、夜も更けてきたためホテルに帰る。十二時を過ぎても花火や音楽が止むことはなかった。



八日目、朝ガンガーへ沐浴に出かける。ガンガーに供える花灯籠を買い船に乗り、人気の少ないガートに接岸し服を脱ぎ川に入る。水は少し冷たく感じ、底はヌルヌルして気持ち悪かったが気を取り直し、川の水を掬い太陽に捧げるよう水を垂らし頭を下げ礼拝。

他の人は尻込みしたが、それほど汚れてはいないように見えたので、思い切った頭の先まで沐浴した。対岸に遮るものが何もないため朝日が地平線から昇ってくるのが美しい。なぜガンガーが聖なる河として崇められているのか少し解った気がし、ガンガーの水を汲み持ち帰った。別のガートへ船を着けると死体焼却場がある。多くの木材が山積みになされ、実際に煙が上がっている。この地で茶毘に付されガンガーに流されるのはインド人の最大の幸福であるとの

説明を受けた。しかしここはあまり見てはいけないとのこと、足早に旧市街地ヴィシユナワート小路を抜けて先に進む。ヴィシユナワート寺院は有名な聖地だがヒンドゥー教徒でなければ中には入れないとのこと、代わりにここを模して造られた寺院を見た。そしてついにインドを離れる時間が近づき、ヴァーナラシー空港へ向かう。長い間お世話になったガイド、運転手、助手にお礼を言い記念写真を撮り別れる。十一日朝六時十分に関西空港に無事到着。危惧していた体調も問題なく旅を終えることができた。

この旅行の目的は仏蹟にお参りすることと、インドの生活と宗教に触れることであった。釈尊が歩いた道を辿り、生老病死の苦しみと厳しい生活苦を抱える人々に自らの覚った安らかな境地を伝えるべく、長い道のりを歩いた釈尊の姿がより一層身近に尊く感じられた。私は今何ができているのだろうかと考えさせられる。インドとは多くの人間と動物が混沌とした中で共生している国、すべてがむき出しであるがままの国とも言おうか。その厳しい生活の中にバスで入っていくのは申し訳なかった気がする。法律上は無くなったとはいえ、現在も差別や職業による階級差が残るこの国も今、発展を遂げつつある。日本に住む私たちにはもちろんのこと、この国の人々にも釈尊の説かれた智慧と慈悲、平等の思想が力を与えてくれることを念願してこの旅行記を終わりたい。